日本ニュージーランド協会（関西）会報　2022 年 3 月号 特別版

世界中がコロナ禍で大きな混乱が起こっています。日本ではあまり紹介されていませんが、ニュージーランドも例外ではありません。NZ の最近の情勢についてファンガレイ在住の客員会員、さかいケイツみかさんからレポートをいただきました。日本とは大きく異なる現地の情勢がご理解いただけると思います。猫の目のように刻々と変化していますので、最新の情勢についてはインターネットなどで検索することをお勧めいたします。

激動のアオテアロア

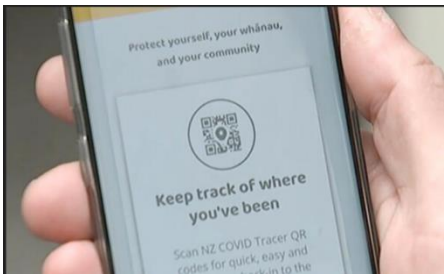
何が起こっているのか

ニュージーランドの社会に激震が走っています。国民感情と行動に大きなうねりと混乱が起きているのです。世界的なニュースになっているカナダのトラック運転手による大規模な強制接種への抗議行動（Freedom Convoy）や、英国や北欧のコロナ規制撤廃の動きに刺激を受けたのかもしれません。

日本では、どのぐらいこちらの様子が報道されているでしょうか？ニュージーランドでは昨年末、2 回のワクチン接種をしない選択をした人すべてが仕事を失いました。医師、看護師、助産師、パイロット、客室乗務員、小中高と大学、専門学校の教員、消防士、警察官、軍人、老人ホームなどの介護関係者、カフェ、レストラン、エステサロン、マッサージ、理髪店などのホスピタリティー（接客）関係者、 ジム経営者やコーチなどのスポーツ関係者、収監施設や MIQ（感染隔離施設）などで働く人たちです。

2 年にわたる Mandate（マンデイト 命令)と Coercion(コアション 強制）に対する不満は、これまでもくすぶっていました。長期にわたる過酷なロックダウン（都市封鎖。地域によっては 2 ヶ月間)や失業、倒産。接種の有無による社会の分断。

それでも大多数のキーウィは慣れないマスクをし、トレーシングアプリ（スマホで立ち寄ったすべての店、施設を記録する）を操作して自己動線を記録･送信し、2 回のワクチン接種を済ませることで日常生活を維持していました。多くの国民が 3 回目のブースター接種を受けようか、というタイミングの Waitangi Day の翌日、首都 Wellington の Beehive（ビーハイブ。国会の建物がハチの巣に似ていることからつけられた愛称）前で座り込みが始まったのです。



☚ スマホのトレーシングアプリ。入店前に QR コードのスキャンが求められる（日本でいう Cocoa）。ワクチンパスポートもスマホにダウンロードして随時携行し、必要あれば提示することになっている。

愛する人のために

昨年 9 月ごろから、政府が ”90% PROJECT”（クリスマスを家族と楽しむために、国民の 9 割の接種の完了を目指そう）を展開。「愛する家族とコミュニティを守るために、あなたも接種を！」という標語をあちこちで見かけるようになりました。メディアも歩調を合わせ、新聞のトップには「本日の（90% project の）到達度」という帯グラフが毎日アップデートされ、テレビでは首相と関係大臣の記者会見の様子が連日ライブで流れました。テレビはもちろんラジオ、ネット上でも、数分おきにコロナ情報の jingle（ジングル 短い音響効果音）と、黄色で統一された政府広報が繰り返し流れました。地域ごとに達成率が発表され、ワクチン接種の進まない地域には大きな予算が投入され、それでも成果が伴わない地域には、ロックダウンの延長が課されました。接種者を増やすためにコンサートが開かれ、接種をした人たちには Kai（お弁当）や 50 ドル分のスーパーの商品券が配られました。子どもが大好きなアイスクリームを配った接種会場もありました。未接種の人の携帯電話には「接種はお済みですか？」というメッセージが届くなど、ニュージーランド中、どこを見ても何を聞いても、ワクチン接種キャンペーン一色に塗りつぶされていました。

「集団免疫の獲得のために」「愛する家族とコミュニティを守ろう」という言葉に動かされ、一部の地域をのぞきワクチン接種は予定通り進み、国全体で 90%をクリア（政府発表）。ところが、同じ頃から多数の副反応疑いの事例、あるいは接種後の死亡事故が相次いで報告され、訴訟やデモも起きるなど社会問題の様相を呈してきました。

分断される社会とコミュニティ

未接種者はカフェ、レストランなどの飲食店はもちろん、劇場、映画館、美術館などの娯楽、文化施設、カフェを併設する大きな公共図書館、スイミングプールやスポーツジムに立ち入ることはできません。店の表に「入店の条件」を説明した政府発行のポスター（図①）が何枚も張り出されていて、ワクチンパスがなければ入店不可、と明記されています。

図①のポスター ☛

いまのところ、ライフラインの救急病院や GP（かかりつけ医）、歯科医などの病院、スーパーはマスクをしていれば利用可能ですが、ペットの病気で獣医を訪ねれば、未接種者は門前払い（ナースが外にペットを受け取りに来て、ペットのみ入場可）です。

☞ 図②のポスター

2 月からの新学期に先立ち、公立高校の敷地内で開催された PTA 主宰の中古の制服セールの会場の外にも、このパスポート提示を求めるポスターが張り出されていて驚きました。未接種の父兄は校内に立ち入れないことを意味し、実際、校長先生と教頭先生が二人三脚で、来場者にパスポートの提示を求めていました。（図②）

パスポートを持たない父兄は、今後、父兄懇談会や学芸会、発表会、卒業式などにも参加できなくなるのかもしれません。現在、5 歳から 12 歳の子どもへのワクチン接種キャンペーンが行われています。すでに放課後のアクティビティではスイミング、ラグビー、ドラマ（芝居）、ジム（体操）などで入場時にパスポート提示を求められ、12 歳以上で未接種の子どもは参加できないようになってきています。

マスク着用に関しても、以前はバンダナも OK（face covering 顔を覆うものであれば、ティーシャツを鼻まで引っ張り上げても OK）だったのですが、先日のインタビューで首相が「今後は耳にかけられるマスク以外は許可しない」と発言。コットンなどのしっかり織られた素材なら最低 3 層が望ましい、呼吸がしやすいように 2 種類以上の布地を使うのが理想的、という行政指導がなされるなど、一段と規制が強まりました。

☜ 「接種の有無にかかわらず、すべての人に門戸を開いています（差別はしません）」というメッセージを店頭に貼り出した店のオーナー（Jessie Rose さん）は警察に通報され、行政指導を受けたうえ多額の罰金を科されました。

あっという間に広まったワクチンパスポートは、アパルトヘイトやユダヤの黄色い星を彷彿とさせるし、これらの差別はキーウィスピリットに反する、だけどウイルスへの感染も怖い、と倫理と恐怖の板挟みになった国民同士のいさかいも起きています。家庭内でも接種済みの者と接種しないことを選択した者に分かれて揉め事が起こったり、未摂取者が加害するかもしれない、という論理で職場や地域で気まずくなったり。『思いやりを』（Be Kind）はアーダーン首相がたびたび口にするメッセージです。ところが首相は「カフェに行きたければ接種を。映画館に行きたければ接種を。未接種の人々の自由が制限されるのは仕方がない」と発言。また「社

会を二つのクラスに分けるのですか」というメディアの質問を受けて「まぁ、そういうことです」と、階級社会と社会の分断を肯定する発言をし、物議を醸しました。

こういう風潮に対して「NZ を分断しないで！」という声が上がり、接種のステータスに関係なく、マンデイト（命令)に反対という一点で団結しよう、という声も次第に聞かれるようになりました。

つい最近では、オリンピックの金メダル保持者で、ヨットの世界的レースである America's Cup で NZ を優勝に導いた立役者、Sir Russell Coutts （2 回のワクチン接種済）が「もう黙ってはいられない。私もウエリントンのデモ会場に行く」と SNS に投稿したことがニュースになりました。

Russell Coutts
17 February at 18:31

I'm heading to Wellington next week to join the protest. It's the first time I've ever felt compelled to join a protest.
I'm not anti-vaccine (I'm vaccinated) but I'm definitely against forced vaccinations.
I'm also strongly opposed to the ever increasing erosion of our human rights and the growing limitations on our freedom of choice. I believe in having the freedom to be able to question so-called "expert" opinion.
I'm against discrimination and the "them and us" society that is being promoted by our current political leaders.
I'm against creating different rights, laws and privileges based on Race.
I'm also against the irrational Covid rules that are currently being mandated in New Zealand, a few examples being;
- The 10 day quarantine that still remains for international travel.
- The absurd rules where our kids (vaccinated and unvaccinated) can sit in the same classroom and play sport together inside the school yard, yet are prohibited from playing sport together outside the school yard.
- The absurd rules that prohibit two young unvaccinated brothers, living in the same household, from sailing together in a sailing competition because they would be within two metres of each other while sailing their boat.
- The rules that require one to put on a mask to walk to and from the bathroom inside a restaurant when masks have already been removed while eating and drinking.
- The contradictory rules that allow unvaccinated people to take a domestic flight (with a negative Covid test) but prohibit a young unvaccinated kid from competing in their sport (outside school).

中央でトロフィーを掲げるのが Sir Russell Coutts

FREEDOM VILLAGE

全国からキャンプ用キャラバンやトラックを、海路ではボートを乗り付けて、国会前に集まった人の数は、あっという間に 2000 人を超えました。顔ぶれを見ると、ふつうのおじさん、おばさんやリタイアした高齢者、ファーマー、ベビーカーを押す若い家族、若者たちです。抗議の賛同者は減るどころか、次第に泊まり込みスタイルへと形を変え、今も多くの人々が国会前でテントで寝泊りしています。一家に 1 つはテントをもち、家族の数だけ寝袋を保有するキーウィのこと、テント暮らしは慣れたものなのかもしれません。それでも、サイクロン（台風）の嵐にも、ポリスの放水にも怯むことなく、日を追うごとに人も増えつづけ、ついに「村」の様相を呈してきました。

‘Freedom village’ (Photo: Stewart Sowman-Lund)

ひろばに集まった人々が占居しているエリアは広く、FREEDOM VILLAGE と名付けられ、雨や嵐の日も、寄付された無料のレインコート配布の援助を受けながら抗議を続行。すでに 3 週間目に入りました。
マンデイトで失業した警官や軍人を中心に村をパトロールしたり、抗議する人たちを見守る自警団もあるのだとか。夜間の安全はもちろんのこと、「Freedom Village の約 15%の参加者は 60 歳を超える高齢者と子ども

であり、55%は女性であるため、安全で平和的な抗議活動が欠かせない」（Protest organizer からのプレスリリース　2022.2. 22)ことを念頭に行動しているそうです。

参加できない人たちから託された救援物資を持って、随時、全国から多くの人が駆けつけるので、これらの救援物資を分け合うために村内には屋台がたくさん立っています。食べ物も飲み物も無料。スキルを持ち寄って助け合おうと、無料の散髪、マッサージ、ヨガ、子どものためのフェイスペイント、寺子屋などのサービスも見かけます。心に音楽を、と野外コンサートも多く開かれ、「村」の自治のためのごみ集めや掃除をする無料ボランティアも大勢いるそうです。

https://www.facebook.com/clark.ellery/videos/1087276688555316/?d=n　（左のリンクをインターネットで検索すれば、映像が観られます)

歌を歌ったり、自由にスピーチしたり、壁画を書いたり、子どものために水の流れる滑り台を設置したり、お祭りのような、友好的で家族的な雰囲気が動画から伝わってきます。

コロナが騒ぎになってから、ハグや握手などの他人との身体的な接触を避ける人が増えました。ウイルス感染を防ぐための政府の指針 social distancing （社会的距離の確保。絶えず他人と距離を空ける）に従ってきたからです。映像を見ても、参加した人の話を聞いても、参加者は手を繋いだり（人間の鎖)、自然にハグしたり、祈ったり、ギターを片手に歌ったり、静かな抗議を続けているように見えます。「もう怖がるのをやめませんか？」というメッセージと問いかけが込められているのかもしれません。野次る姿も見かけますが、圧倒的に少数派です。お年寄りの姿も目立ち、マオリの若者を中心に、抗議する人たちをハカで応援する様子や、「野次らず、攻撃せず、平和に抗議を」と互いをたしなめたり、呼びかけたりする映像も流れました。「村」として抗議者たちが力をたくわえる以前から現在に至っても、政府は「マイノリティが騒いでいるだけ」「怪しい情報、間違った情報に踊らされている。政府広報の情報のみが真実だ（we will continue to be your SSOT (single souce of truth)」などと切り捨て、対話の要求に応じていません。

この間、様々な映像がネットに公開されました。夜間のテントへのスプリンクラーによる散水、色とりどりのテントの力づくの排除、特大のスピーカーから特殊な周波数の爆音を流し続ける様子、抵抗しない 17 歳の若者に馬乗りになって頭を地面に押しつける様子、デモの輪から髪を引っ張って若い女性を引きずり出す様子。すべて、マスクをした制服姿のポリスが関わっていました。これらの政府の強硬なやり方に反感を抱いた人々に賛同者を増やすことになったのは無理のないことかもしれません。ただ、多くの逮捕者も出ました。なぜ逮捕者が出るようなことになったのか経緯は不明ですが、現場にいた多くの人たちが撮影した画像からいずれ答えが出るのではないかと思います。

メディアに対する不信も募っていますが、NZ Herald などの主要メディアは依然として政府発表と足並みを揃え「興奮した暴徒の集まり」「(村は)子どものいるべき雰囲気の場ではない」「ポリスが襲われた」など、プロテストする人を貶める報道しかしていません。ネットに溢れる多くの映像と比べても、何かおかしい、と思わざるをえません。

人々の求めるものは？

抗議している人たちの主張は様々です。

Pro choice 条件をつけずに個人の自由の保障を
End Mandates Now　即刻、義務規程の撤廃を
Hands off our Kids 子どもへの接種の中止を
Freedom over Fear 恐怖を克服して自由を求めよう
My Body, My Choice　身体に関する決定はわたしのもの

☝ ライトアップされたビーハイブ（国会議事堂）前で静かに祈る

https://www.instagram.com/tv/CabeuAjtLiX/?utm_source=ig_web_button_share_sheet

（上の部分をインターネットで検索すれば、映像が観られます）

デモ参加者の車で埋め尽くされていた Wellington の中心街は、明け方 4 時に出動したポリスによって撤去が始まりました。不法駐車が地域住人の利便を損なう、という批判に応え、村の代表が責任者と話し合った結果、平和的な解決をしたという報道がありました。

2 月 25 日、「警官と軍に課せられたワクチン接種命令は違憲である」という判決が出ました。最高裁での判決です。これまでは、決められた期日までに 2 回の接種を受けないことは、仕事を失う(No Jabs, No Jobs。Jab は注射の意味)ことを意味しました。デモ参加者は新たに「3 月 1 日までにすべてのマンデイトを撤廃せよ」と期日を区切って交渉を始めました。政府がどんな対応に出るのか注目が集まっています。恐れをなしたか見切りをつけたか、在住邦人が次々と日本に引き揚げています。知っているだけでも、ニュージーランド永住権を持った 6 家族が帰国しました。「帰国セール」と銘打った日本語の不用品販売の広告を多く目にするようになっています。

2 月の最後の週末は、全国一斉に Auckland、Napier、Christchurch、Dunedin でも大規模な抗議のデモ行進がありました。Auckland では 車の交通を一時遮断し、通常なら歩いて通ることのできない Harbour Bridge を、隊列を組んで行進する様子がニュースでも流れました。とにかくすごい勢いで情勢が変化しています。この会報が出る頃には全て過去の情報になっていることも容易に想像できます。もうすぐ秋。流れが変わり、新しい風が吹こうとしています。

https://www.youtube.com/watch?v=eD2z8TRAkdk　ネイピアの様子
https://www.youtube.com/watch?v=NmSTonRw5dQ　オークランドの様子
それぞれリンク URL をインターネットで検索すれば映像が見られます

（注）　2022 年 2 月 27 日時点の情報に基づいて書かれています。あくまでも個人の意見であり、日本 NZ 協会（関西）の見解ではないことをお断りしておきます。また、動画の閲覧が難しい場合は事務局へお問い合わせ下さい。

自由追求の道のり

2022 年 3 月 3 日記

政府は 3 月 2 日早朝、頑丈な盾を持ち、ヘルメットを被った 500 人を超える「Riot Squad 治安警備機動隊」を抗議者の寝泊まりする国会前に投入しました。「Freedom Village（自由のための村)」は文字通り炎上。900 以上のテントは引き裂かれ、300 台以上の車がレッカーで撤去され、抗議の声をあげていた人の中から 100 人の逮捕者が出ました。「23 日の間、政府との対話を求めて平和な抗議を続けてきた。それなのに…」と茫然自失する村の住人たち。抗議者に数多くの負傷者が出たにもかかわらず、政府とメディアは、これまで警察官の負傷者数のみを発表するにとどまっています。

https://fb.watch/bw-xIhC5o8/

(Liberty Bites, March 2)

2 月 7 日から約 10 日で「自由のための村へと変貌を遂げた国会前の広場」ドローンで上空から撮影

https://youtu.be/dWOurdwfVno

村はボランティアの働きと寄付だけでまかなわれていました。ケガ人はマンデイト*(補注参照）で仕事ができなくなったドクターやナース、救急隊員が常駐するテントで無料で治療を受け、子どもたちは、職場を追われた先生が開いた「寺子屋」で学んでいました。ワクチンパスに反対して営業できなくなった美容師は無料のヘアカットを提供、それぞれができることを提供して自治の村が成り立っていたのです。

政府は抗議者の対話の求めに応じないまま、23 日目の朝、村の撤去を目的に訓練を受けた大量の機動隊員を導入。「村」として平和に機能していた広場はこの日、１時間ほどであっという間に瓦礫の山になりました。

https://www.youtube.com/watch?v=ayDYyNa_eWo

（Coronavirus Plushie)

動画は MOVE!!（そこをのけ!）と号令をかけながら歩を進める機動隊の様子。抗議者の寝泊りするテントを地面からはがしとり、じゃまな者は老若男女関係なく力づくで押しのけ、盾を使い集団で「村人」を叩きのめす様子もはっきり記録されています。機動隊の催涙スプレーや胡椒スプレーをまともに顔面に浴びた人々の阿鼻叫喚。燃えるテントの間を右往左往する人々。放水。怒号。国会前の広場でどす黒い炎が上がる様子もとらえられています。

上空をヘリコプターが不穏に旋回するなか、マスクなどで顔を隠した若い男性たちのグループが警官に殴りかかったり、燃え盛る炎にテント村住人のテントや椅子を次々と投げ入れたりする様子も流れました。「どの顔も見かけない顔だった」と村の住人。３週間以上もの長い間、村の中で寝起きを共にし、ずっといっしょに行動しているから、グループや互いの顔は見知っているというのです。では誰が？

https://www.youtube.com/watch?v=n6HspPPTwWc

テント村の住民はマンデイトで職を失った人も多く、財産らしきものも持たない人がたくさんいたはずです。その人たちがなけなしの財産やテントをガソリンをかけて自ら燃やす理由があるでしょうか。「隣人」の持ち物を騒ぎに乗じて燃やす理由も見当たりません。また抗議者たちは「すべての義務命令の撤廃を」と要求していたわけですから、「村人はマスクをしていない。だから互いの笑顔が見える」というのが共通の認識だったはずです。
ではいったい、主要メディアで繰り返し報道された「猛り狂ったようにテントを燃やし、ポリスや機動隊に暴力をふるったマスク姿の人たち」は誰か、ということになります。

アーダーン首相は当初から「解散して家に帰れ。そうすれば交渉のテーブルにつく」と発言してきましたが、抗議者は「(これまでも公約を反故にしてきたから) 信じられない。先に交渉の約束を」と譲りませんでした。

「村にいたのは僕のようなどこにでもいる、ふつうのキーウィだ。世界の潮流に逆らい、『話し合いを！』という声を無視してきたのは政府の方だ」(50 代元教師男性)

「ジャシンダ(首相)は一度も「村」に足を運んだこともなく、私たちを「暴徒」と決めつけたメディアといっしょに初日から誹謗中傷してきた」(50 代女性)

そして２日の夕方、アーダーン首相は「不法に長期国会前を占拠したグループは、勇敢な警察によって取り除かれた。長い間我慢をしてくれた Wellington の市民のみなさんに礼を言う。陰謀論を基とする誤った情報に踊らされた少数集団が、暴力的な態度でわれわれの大切にする価値観を脅かしたことは容認できない。苦しい時だが、何を優先的に守るべきなのかを思い出してほしい」とさとし、翌日の国会でパンデミックにおいては、大きな目標のためにもう少しの間、多少の犠牲は耐え忍ぼうと国民にハッパをかけました。

政府の広報がテレビやラジオによって浸透しているのに比べて、個人が現場から発信する情報以外に、反対側の意見がほとんど聞こえてきません。まるで言論統制が敷かれているかのようです。野党もダンマリを決めこんでいるのが気がかりです。

「不法占拠」や「暴力」というテント村の撤去の根拠となった点について、いま、多くの人たちによって撮影された動画の検証などを通じて事実を炙り出そう、という活動が弁護士のグループを中心に始まっているそうです。

「このままでは『献身的なポリスの働きのおかげで、小数派で自己中心的な暴徒を国会前から一掃できた』という政府のストーリーが定着してしまう。暴力を振るったのはポリスだ」(50 代ボランティア救急隊女性)

「抗議者の関わっていない暴力沙汰が、メディアによって悪意を持って増幅され、それが事実として定着するかもしれないと思うと恐ろしい」 (40 代ボランティア自警団男性)

盾をもちヘルメットをかぶった物々しい姿の機動隊をまえに Amazing Grace を口ずさむ抗議者たち
(2:40 ごろから)
https://youtu.be/B9lGNGdicqE

撤去によってテントや車を失くした多くの Freedom Village の元住人は、いまや国内で「難民」状態。

ひと息入れたくても、ワクチンパスがなければカフェにも立ち寄れず、宿泊施設もパスがなくては宿泊できない（屋外のキャンプ場でも利用にはパスが必要）ので、大半は寝泊りする場所の確保に奔走しているはずです。夜は冷え込む Wellington の町でどうサバイバルしているのか気になります。

「ヘイトや恐怖による社会の分断はごめんだ。 今こそ unity / solidarity（協調・連帯)を呼びかけるべきだ」(年齢不詳男性)

「これからが正念場。希望は捨てない」(30 代女性弁護士)

今年１月末の世論調査ではアーダーン首相の支持率はさらに下がって 35%に(1news Kantar Public Poll Report 調べ）。この数字は労働党が 2017 年に政権をとって以来最低です。労働党政府が現在の全体主義体制を推し進めれば、さらなる反発は避けられないと思います。
そしてもし、このまま国内の情報の一元化（one source of truce）が進めば社会の分断が加速、個々が冷静な判断をするのはますます難しい状況に置かれるでしょう。

連日、テレビは国内のオミクロン感染者の増加のニュースでもちきりです。ワクチンやブースター接種を呼びかける CM が繰り返しテレビとラジオで流れています。今回のキャンペーンの焦点はいかに子どもへの接種率を高めるか、にあります。RATs (PCR 検査に代わる迅速で手軽、というキャッチフレーズの検査キット)がいよいよスーパーの棚に並びます。ガソリンを始めとする、生活必需品の異常なまでの物価上昇も懸念されています。
白い雲のたなびくアオテアロア。民主主義の正念場、歴史の分岐点に立っています。

In the bonds of love we meet, Hear our voices, we entreat,
God defend our free land.
我らを結びし愛の絆　届け我らの声　神よ我らの自由になる国を守り給え

（ニュージーランド国歌より）

*補注１．2020 年から政府はマンデイト(no jabs, no jobs、接種しなければ仕事をさせない、という意味))政策を進めてきました。一気に、ではなく少しずつです。まず国境検疫関係者、次は刑務所関係者に適用、というように。ごく最近マンデイトされたのは役所で働く人々で、接種の締め切りは 3/1 でした。政府発表とは裏腹に、多くの失業者と貧困を招いています。

２．３月２３日、政府の方針に大きな転換がありました。アーダーン首相が新たな新型コロナウイルス感染症保護枠組「通称：信号機システム」を発表したのです。(詳細は総領事館からのお知らせをご覧ください)。と特筆すべきは、ワクチンパスポートは永久廃止ではなく、システムは温存、とりあえず当分の運用を止めるにとどめること。ワクチンパスポートの運用 (使用を継続するかどうか) は個々のビジネス判断に委ねる、などと変更の適用基準が非常に曖昧であること。緊急事態条項がそのまま据え置かれるなどの内容になっていることです。４月４日深夜から施行となる「テンポラリーな自由」の意味合いに、引き続き注目したいと思います。

https://www.youtube.com/watch?v=5VOS1ywkV-s

River of Filth | The peoples Perspective　By Luke Reich　タイトルは抗議者のグループを「不浄の塊」と表現した労働党議員の発言から名付けられた。Made in NZ の最新のドキュメンタリ（３月２３日リリース）

（さかいケイツみか）

■ 在オークランド日本国総領事館よりお知らせ

Ⅰ.3月18日

3月16日、アーダーン首相は、国境管理の段階的緩和の当初計画を前倒しし、観光客の入国を再開する旨発表しました。また、NZ政府は、段階的緩和の措置の内容を改定し、ウェブサイトに掲載しました。概要は以下のとおりです。

1　アーダーン首相声明の概要

(1) 豪州のスクール・ホリデーに合わせて観光客の入国を再開し、新型コロナウイルス感染症からの経済回復を加速させる。

(2) 4月12日(火)午後11時59分から、豪州人は、隔離なしでNZに渡航可能になる。そして、5月1日(日)午後11時59分から、査証免除対象国(英国、米国、日本、ドイツ、韓国、シンガポール等といった観光客の主な出身国で構成される)の渡航者、及び有効な滞在査証を所持する渡航者で、ワクチン接種が完了している者は、NZへの渡航が可能となる。

(3) 国境閉鎖は、2年前に新型コロナウイルス感染症を阻止するためにとった最初の対応の一つであり、必要な役割を果たした。しかし今は、NZ国民のワクチン接種率が高くなっており、また、オミクロン株の蔓延がピークを過ぎると予測されていることから、国境再開は安全である。

(4) 歴史的に、NZに到着する国際旅客の40%が豪州からであり、毎年150万人の豪州人がNZを訪れていた。観光を拡大するには時間がかかるが、本日の発表は、過去2年間にわたり、他の多くの者よりも大きな困難を強いられた観光業者を励ますものである。他国と比較して、新型コロナの死亡率が低く、ワクチン接種率が高いNZは、観光客が安全に訪れることができる国であり、その点を誇りとしている。

2　今回発表された主な措置

(1) 4月12日(火)午後11時59分から、次に掲げる渡航者で、かつワクチン接種を完了している者は、自己隔離又は管理隔離(MIQ)の必要なく、NZへの入国が可能となる。

・豪州の国民及び永住権所持者(世界中のどこからでもNZ渡航が可能)

・一時的就労査証(temporary work visa)及び学生査証の所持者で、かつ、現在でも査証取得の条件を満たしている者(これらの査証の所持者のうち、現在はNZ国外に滞在し、NZに戻ることを希望する者を含む)(世界中のどこからでもNZ渡航が可能)

・第2学期(semester 2)からNZで就学する留学生(5000名を上限とする)

(2) 5月1日(日)午後11時59分から、次に掲げる渡航者で、かつワクチン接種を完了している者は、自己隔離又は管理隔離(MIQ)の必要なく、NZへの入国が可能となる。

・査証免除対象国の国籍を有する者(注:日本国籍者を含む)

・査証免除対象国以外の国籍を有する者で、すでに有効な滞在査証(visitor visa)の発給を受けた者

(3) すでにNZに滞在している一時的滞在査証(temporary visitor visa)の所持者は、査証の条件が許す限りにおいて、いつでも出国し再入国することができる。保護者査証(guardian visa)の所持者は、この措置に含まれる。

(4) NZに渡航する者は、出発前に受けた新型コロナ検査での陰性結果を持参しなければならない。

（5）NZ 到着日乃至 1 日目に 1 回目、5 日目ないし 6 日目に 2 回目の迅速抗原検査（RATs）を受検し、その結果を報告しなければならない。RATs によるすべての陽性結果は登録され、陽性の場合は続いて PCR 検査を受検しなければならない。
（6）7 月（日付未定）から、雇用者認定就労査証(Accredited Employer Work Visa)の所持者で、かつワクチン接種を完了している者は、自己隔離又は管理隔離（MIQ）の必要なく、NZ への入国が可能となる。近日中に関連情報が発表される。
（7）査証免除対象国以外の国籍を有する者の NZ への渡航は、現時点では 10 月（日付未定）に再開が予定されており、近いうちに、この渡航のオプションを発表する。

（アーダーン首相声明）
https://www.beehive.govt.NZ/release/government-reopens-new-zealand-tourism
（NZ 政府の「Unite against COVID-19」ウェブサイトの国境管理関連ページ）
https://covid19.govt.NZ/international-travel/travel-to-new-zealand/when-new-zealand-borders-open/
（NZ 国境管理の詳細）
https://www.immigration.govt.NZ/about-us/covid-19/border-closures-and-exceptions/border-entry-requirements

※新型コロナウイルスに関する日本・NZ の総合情報として、在ニュージーランド日本国大使館のホームページに関連情報を掲載しています。
＜在ニュージーランド日本国大使館＞
（日本語）＊帰国の手続き（防疫措置等）、NZ 入国の情報等
https://www.NZ.emb-japan.go.jp/itpr_ja/corona_vrs_j.html
（英語）＊主に日本のビザ・再入国・防疫措置の情報
https://www.NZ.emb-japan.go.jp/itpr_en/corona_vrs.html

※当館 HP（日本語）には、過去に発出したお知らせを掲載していますほか、当館 HP(英語)にも関連情報を掲載しています。
＜在オークランド日本国総領事館＞
（日本語）＊新型コロナウイルスに関する過去の領事メール
https://www.auckland.NZ.emb-japan.go.jp/itpr_ja/covid19_j.html
（英語）
https://www.auckland.NZ.emb-japan.go.jp/itpr_en/visa.html

Ⅱ.3 月 23 日

３月２３日、政府の方針に大きな転換がありました。アーダーン首相が新たな新型コロナウイルス感染症保護枠組（通称：信号機システム）を発表したのです。概要は以下のとおりです。

１　アーダーン首相声明の概要

（１）オークランドにおけるオミクロン株感染はピークを超え既に大幅に減少しており、全国で４月初旬までに感染減少が見込まれる。今日までの感染者は 50 万人を超え、専門家は、実際には 170 万人が感染したであろうと試算している。この数字とともに、95％の NZ 市民がワクチン接種を完了したことは、我々が高い水準の集団免疫を獲得したことを意味する。我々のこれまでの努力により、対応方法を変えてよい状態になった。

（２）４月４日深夜以降、政府は「My Vaccine Pass」（ワクチンパス）の使用を求めない。これまでワクチンパスの提示を必要としていた場所に、ワクチンを接種していなくても入場できることになる。いくつかの業種、イベント及び会場においては、引き続きワクチンパスの提示を求めることを選択すると認識しており、ワクチンパスのシステム自体は維持する。

（３）4 月 4 日深夜以降、医療、高齢者介護、収監施設、国境管理に従事する者以外のワクチン接種義務を撤廃する。

（４）３月 25 日深夜以降、屋外での集会の人数制限を撤廃する。屋外での集会は安全であり、特に、新型コロナウイルス感染症保護枠組(COVID-19 Protection Framework)（信号機システム）の「赤」の下では、屋外集会を奨励する。また、「赤」の下で設定されていた屋内での集会の人数制限を緩和し、上限を 100 人から 200 人に引き上げる。

（５）端的に言うと、信号機システム「赤」では屋内集会の制限とマスク着用、「オレンジ」ではマスク着用、「緑」では勧告（ガイダンス）の適用、という形となる。全ての段階において、新型コロナウイルス検査及び隔離の要件は現在と同じまま残る。新たな変異株の発生及び将来の感染急増に備え、信号機システムは維持する。安全が確認された場合は、「オレンジ」に移行し、最終的には「緑」に移行する計画である。

（６）これまでに NZ 市民が払った犠牲によって､NZ は先進国で最も低い感染者数と死亡者数を記録してきた。今は次のステップに移行する時期であり、新しい制度が経済活動をサポートし、人々は普通の状態に少し近づいたと感じることになる。我々の新型コロナ規制は、前進への力強い基盤となっている。

２　今回発表された主な措置

（１）現状の信号機システム「赤」の設定を当面維持。

（２）信号機システムの色分けの設定は定期的に見直す。次回の見直しは 4 月 4 日（月）に行い、NZ 国内各地域の色分けを決定する。

（３）3 月 25 日（金）午後 11 時 59 分以降、信号機システムによる規制は次のとおりに簡略化する。

ア　「赤」設定

・屋外集会の人数制限の撤廃（ただし、4 月 4 日（月）午後 11 時 59 分まではワクチンパスが必要）。

・屋内集会の人数制限を 200 人とする（ただし、4 月 4 日（月）午後 11 時 59 分まではワクチンパスが必要）。

・屋外においてマスクを着用する必要はない。

・屋内では、引き続きマスクの着用が求められる。

・立寄り先で接触追跡システム用 QR コードをスキャンする必要はない。

・事業者は、QR コードを掲示する必要はなく、また来訪者記録の義務もない。

イ　「オレンジ」設定

・屋外・屋内の双方において、集会の人数制限を撤廃。

・屋外においてマスクを着用する必要はない。その他のマスク着用規則は変更なし。

・事業者は、QR コードを掲示する必要はなく、また来訪者記録の義務もない。

ウ　「緑」設定

・規制なし。

・健康を維持する行動が推奨される。

・立寄り先で接触追跡システム用 QR コードをスキャンする必要はない。

・事業者は、QR コードを掲示する必要はなく、また来訪者記録の義務もない。

（4）4 月 4 日（月）午後 11 時 59 分以降、政府によるワクチン接種義務の一部を撤廃する。引き続きワクチン接種義務の適用対象となる者は次が含まれる。

・医療及び障害者部門に従事する者

・刑務所の職員

・国境管理及び管理隔離（MIQ）に従事する者

※今回の発表内容の詳細は、次のウェブサイトをご参照ください。

（アーダーン首相声明）

https://www.beehive.govt.nz/release/post-peak-plan-safe-return-greater-normality

（アーダーン首相演説）

https://www.beehive.govt.nz/speech/post-peak-plan-safe-return-greater-normality

（NZ 政府「Unite against COVID-19」ウェブサイト：今回の発表内容の詳細説明）

https://covid19.govt.nz/traffic-lights/changes-to-the-traffic-light-system/

＊3 月 23 日以降の情報については､NZ 政府･在オークランド日本国総領事館等の HP を検索してご覧ください。